

子どもたちの未来に、 安心という土台を

私がまちづくりで大切にしている柱は、「教育」「産業・経済」「医療・福祉」の3つです。人は学び、働き、やがて医療や介護を必要とする時期を迎えます。生まれてから人生の最終段階まで、この3つを切れ目なく支えることが、まちづくりの基本だと考えています。

特に力を入れてきたのが、子育て世代への支援です。町長就任以来、若い職員や子育て世代の保護者と対話を重ね、「教育にはお金がかかる」という切実な声を数多く耳にしました。私自身も若い頃は都会で暮らし、限られた生活費でやりくりした経験があります。だからこそ、子育て世代の不安や負担を少しでも軽くしたいという思いで、「行政として何ができるのか」を職員と共に考え続けてきました。

もちろん、何でも実現できるわけではありません。制度は一度始めれば、途中でやめることはできません。だからこそ、財政とのバランスを慎重に見極めながら、「将来にわたって続けられる支援か」を何度も議論し、実現可能なものから形にしてみました。

現在は、子どもの医療費助成をはじめ、おむつ・ミルク代への支援、保育料の無償化、ランドセルや制服代、修学旅行費への支

援、高校生・大学生への修学支援金や貸付け、医学生への奨学金制度など、成長段階に応じた支援を行っています。どれも、子どもたちの未来を地域全体で支えたいという思いから生まれた取り組みです。

また、若い世代が安心して暮らし続けられるように団地の整備にも力を入れてきました。旧学校跡地を活用した分譲地には多くの子育て世帯が暮らし始め、子どもたちの元気な声が響く新たな地域コミュニティが育っています。人口減少に特効薬はありません。それでも、一人ひとりが安心して子

町長メッセージ

人生を支える、 まちでありたい

南部町長 工藤祐直

もを育て、この町で暮らしよかつたと思える環境を積み重ねていくことが、未来への一番確かな投資だと私は考えています。町政を預かってきた20年、その思いは変わることはありません。

支え合う地域が、 暮らしを豊かにする

安心して暮らせるまちは、行政だけではつくれません。災害時、行政がすぐにすべての地域へ駆け付けられるとは限らないからこそ、日頃から地域で支え合える体制を整えておくことが大切です。その中心となるのが、自主防災組織や町内会の存在だと考えています。

南部町では、各町内会に地域担当職員を配置し、地域の声を行政につなぐ取り組みを続けています。住民の皆さんと一緒に地域の課題を考え、解決につなげることは、行政の大切な役割です。町と地域が日頃から



顔の見える関係を築いていることが、いざという時の安心にもつながっています。

しかし、町内会は「必要だから」という理由だけで続くものではありません。少子高齢化が進む中、地域の活動を次の世代へ受け継いでいくためには、若い世代が自然に地域へ関わるきっかけが必要です。

その役割を担っているのが、町内の各地域に受け継がれてきた伝統芸能や祭りです。地域には、南部手踊りや民謡、神楽、えんぶりなどを長年受け継いできた多くの師匠がいます。子どもたちは師匠から直接学び、祭りで披露する中で、伝統と人とのつながりを受け継いでいます。地域との関わりは、こうした活動の楽しさや誇りの中で自然と育まれていくものだと思います。

こうして育まれた地域での経験は、やがて「この町が好き」という気持ちにつながっていきます。子ども頃の楽しかった思い出や、地域の皆さんとの触れ合いは、大人になってからも心の支えになります。そうした地域への愛着を次の世代へ受け継いでいくことも、私たちのまちづくりには欠かせないと考えています。

人を育み、未来へつないでいく

未来の南部町を考える上で、名久井農業高校は欠かすことのできない存在です。農

業を学ぶ学校であると同時に、本町の基幹産業である農業を支え、将来の担い手を育てる地域の財産でもあります。

人口減少が進む中、町・町議会・PTA・後援会・同窓会などが連携した応援団体を立ち上げ、高校魅力化コーディネーターの配置や「地域みらい留学」への参加など、高校の魅力化に取り組んできました。農家や住民の皆さんと関わりながら高校生活を送る3年間は、生徒たちにとって大きな財産になります。そして、生徒を迎える地域にも新しい出会いや刺激をもたらしてくれています。

人を育てる場は学校だけではなく、農家や住民の皆さんが生徒を温かく迎え入れ、共に学び、共に成長する。そんな地域ぐるみの教育こそが、名久井農業高校の大きな魅力であり、南部町らしさでもあると思います。

来春には、戦時中に南部町へ疎開した黒柳徹子さんの記念ルームを南部町歴史ミュージアム内に開設する予定です。この構想の始まりは、8年ほど前に届いた1枚の匿名の葉書でした。「記念ルームをつくってはどうか」という提案が書かれた葉書を私は大切に持ち歩きながら、多くの人に「こんなことができたらいいですね」と話してきました。そんなある日、テレビ番組「徹子の部屋」で、黒柳さんが疎開時代の思い出を語り、「南部町に行ってみた」と話される姿を目にしました。その言葉に「今こそ形にしたい」と動き始めたのです。長い年月を経て実現へ向かうこの取り組みも、1枚の葉書から始まった人と人との縁が、少しずつ形になったものだと感じています。

人を温かく迎え入れ、その縁を次の世代へ受け継ぐ。南部町には、昔からそんな風土があります。子どもたちの未来を支え、地域への愛着を育み、人と人との縁を未来へつないでいく。その積み重ねが、南部町のこれからをつくと信じています。町民の皆さまと共に、一人ひとりの人生を支えるまちづくりを、これからも着実に進めてまいります。

プロフィール——工藤祐直（くどう・すけなお）

昭和30年（1955）、青森県南部町生まれ。明治学院大学法学部を卒業後、民間企業を経て旧名川町役場に就職。その後、平成12年（2000）に旧名川町長に就任、平成18年に合併による新生南部町の初代町長に就任し、現在6期目、通算8期目。

